主 題：主を信じて従いなさい

聖書箇所：コリント人への手紙第一 7章17-24節

コリント教会のさまざまな問題と質問に答えるために記されたのがこの手紙でした。私たちは7章からさまざまな質問に対するパウロの答えを見てきました。7章の中には結婚についての質疑応答がありました。8章には偶像に捧げた肉について、12章には霊的賜物についての質問にパウロの答えが記されています。死人のよみがえりについては15章、そしてエルサレム教会への献金について16章の中に記されています。

その中で、前回私たちは結婚についてのパウロの答えを5つ学びました。いろいろな質問がありましたが、少なくともこのことから言えることは、このコリントの教会のクリスチャンたちは真理を知ることが望んでいたということです。これについて真理は一体何だろう、これについての主の教えは何だろうと彼らは知りたかったのです。ただ離婚についての質問が多いところから見て、どうも結婚するよりも独身でいることの方が神に喜ばれるに違いないと考えていた節が読み取れます。パウロはその質問に答えながら、彼らが信仰者としてそれにふさわしく生きるために必要な真理へと彼らを導いていこうとします。いろいろな問題や疑問があるけれども、そこからもっと根本的な、もっと大切な信仰者としての歩みへとパウロは彼らを導いていこうとするのです。結婚のさまざまな問題から、生きるということについて、人生ということについてパウロは語っていこうとするのです。

きょう我々が見る17-24節は彼らからの質問に対する答えというよりも、パウロがコリントだけではなくてさまざまなところで話していた内容が記されています。彼らの質問に対する答えはまた25節から出てきます。パウロはあなたたちは特別な存在で、特別な務めを神様からいただいている、それを果たしなさいと彼らに教えようとしたのです。17節「ただ、おのおのが、主からいただいた分に応じ、また神がおのおをお召しになったときのままの状態です。私は、すべての教会で、このように指導しています。」とあります。まず皆さんに見ていただきたいのはこの「歩むべきです」という動詞です。これを単純に辞書で引くならば、「生活する」や「生き方」、「自分の生活の振る舞い」という意味があります。ですから、パウロはまずこの17節のみことばで、我々救いにあずかった者としてどういうふうに生きていくことがふさわしいのかについて教えます。レオン・モリスという先生は「歩むということは、クリスチャン生活を絶えず成長しながら生きるという意味のパウロの好んだ隠喩的表現である」、つまり「歩む」ということばを使っているけれども、彼が本当に言いたかったことは、クリスチャン生活を絶えず成長しながら生きるという意味なのだと言います。まさにそのことをここで見て取ることができます。

また、これが一時的な話ではなく、継続した歩みであるということ、生活であるということをお我々はこの箇所から教えられます。それはこの動詞に現在形が使われているということから見ることもできます。ですからパウロは習慣的に継続してこのように歩みなさい、生活をしなさいと教えます。パウロが教える信者にふさわしい生活というのはどういう生活なのかを見ていきましょう。

1. 「信者にふさわしい生活」 17節

パウロはここで二つのことを教えます。一つは「主からいただいた分に応じ」て生活することです。二つ目は「神がおのおをお召しになったときのままの状態」で生活すること、この二つのことが17節に記されています。それがどういう意味なのかを今から見ていきます。

1) 「おのおのが主からいただいた分に応じて」生活する 17節

一つ目「おのおのが、主からいただいた分に応じ」て生活するとあります。パウロがどういうことを言わんとしているかです。まず「いただいた分」という動詞を我々は見なければいけません。いただいた分というのは、「分け与える」とか「割り当てる」とか「分配する」という意味です。自分のものを分け与える、だれかに何かを割り当てる。何かを分配していく、そういう意味を持ったことばです。では一体パウロは何を主から分配された、与えていただいたと教えているのでしょうか。

◎ 「いただいた分」

実はこの「いただいた分」と訳されていることばは、新約聖書の中に14回出てきています。今から皆

さんとご一緒にその中の2カ所を見ます。なぜかという、それによって少なくとも彼が言いたいことを酌み取るためにです。

① IIコリント10：13

そこにはこう記されています。「私たちは、限度を越えて誇りはしません。私たちがあなたがたのところまで行くのも、神が私たちに量って割り当ててくださった限度内で行くのです。」、ここに「割り当ててくださった」と書かれています。これが1コリント7：17の「いただいた分」と同じことばが使われていて、ここではこんなふうに訳されているのです。この「割り当ててくださった」ということばをもう少し辞書で見ると、「特別な、また特定の役割や責任に任命される」、「特別な仕事を与えられる」、「特別な役割に指名される」という意味があります。

ではパウロはどんな特別な務めを神様からいただいたか、彼自身がそのことを伝えています。ローマ1：5に「このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。」とあります。ですからパウロは私は神様からこの「使徒」という特別な任務を授かった、この特別な務めに神は私を召してくださった。これが与えられたものだと言います。ですから、これが神が割り当ててくださったもの、主からいただいた分です。パウロはこの福音宣教について使徒20：24で「主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかす任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」と言っています。彼は「主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかす任務」と言っています。彼が自分で勝手にやっているのではない。私は神様からその務めをいただいたのだと。まさに「割り当ててくださった」というそのことばの意味です。神がこの務めに私を召してくださった。この務めに私に与えてくださったのです。ですから、2コリント10：13で、パウロは「私たちがあなたがたのところ（コリントの教会）まで行くのも、神が私たちに量って割り当ててくださった限度内で行くのだ」と言いました。つまり私があなたがたの教会に行くのは、それが神が下さった務めだからだと。神は私にこの福音を伝えるという務めを下さった。だから私はその務めに基いてあなたたちのところに行くのだとパウロは言ったのです。

きょうのテキストをもう一度見ると、「主からいただいた分に応じ」と言いました。今までのところを見る限り、私たちが言えるのは主なる神様からおのおの各信者に与えられた特別な仕事、特別な役割があるということです。パウロは使徒でした。私たちは使徒ではありません。でも基本的に同じ務めが私たちに与えられている。言うまでもなく、それはイエス・キリストを証するという事です。イエス・キリストのすばらしい救いを伝えるということです。この方が本当の神であり、この方によってのみ救いにあずかることを伝えるということです。先ほどの2コリント10：13に「神が私たちに量って割り当ててくださった」ということばがありました。ということは、あなたに実現できないような務めを神はあなたに与えないということです。感謝なことは、神はあなたや私のことをだれよりもわかってくださっている。神はあなたに重荷となることを与えないということです。だから私たちの信仰は神が言われたことをそのとおり信じるのです。神ができると言われたらできるのです。なぜなら、神がそう言われているからです。神様は決して、いや、それは気づかなかったとか、知らなかったという弁解をなさる神ではないのです。そんなことはあり得ないのです。神はあなたのことすべてを知っているのです。その神ができると言われたらできるのです。みことばは我々にそのことをちゃんと教えてくれるのです。だから神様があなたに与えてくださったその務めをあなたは果たすことができます。

② ローマ12：3

もう1カ所、ローマ12：3に「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおののけに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」と、このことばが出てきます。「神がおののけに分け与えてくださった信仰の量り」の「分け与えてくださった」ということばです。同じことばがここで使われ、1コリント7：17に「いただいた分」と訳されていたのが、ローマ12：3では「分け与えてくださった」と訳されています。

(1) 神が分け与えてくださったもの

では一体何を「分け与えてくださった」のか——。主はあなたが救いにあずかった時、主があなたを救ってくださった時に、あなたに特別な霊的賜物を与えてくださっている。神様は「みこころのままに、お

のおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。」と1コリント12：11で教えます。この箇所をよく考えてみてください。御霊なる神様は「みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださる」、ですから賜物をいただいていないクリスチャンはいないということです。ただ与えられている賜物はみんな違うのです。同じ賜物を与えられている人は、この世に二人といません。そのことをパウロは人間のからだを例えに使って説明します。同じ1コリント12：14に「からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成って」とあります。私たちもよくわかりますよね。からだにはいろいろな器官があります。からだとして行動するために、みんなそれぞれ必要です。からだとして存在するためにはそのパーツがみんな必要なのです。パウロはこう言います。「もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょうか。」「からだ全体が聞くところであったら、どこでかぐのでしょうか。しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。」、つまり彼が言いたいのは、あなたたちはそのからだのパーツのように特別な賜物を与えられた存在だということです。

なぜ神様はあなたに特別な賜物を与えてくださっているのかと言うと、それはその賜物をあなたが用いることによって、あなたの周りのクリスチャンたちがその信仰において成長するからです。教会においてあなたがその賜物を使えば、あなたの周りの信仰者は成長するのです。その目的を持って神はあなたにその賜物を下さったのです。神様はこの世に教会というものをお造りになり、その中に私たち信仰者を置いてくださり、それぞれ異なった賜物を与えられている。その賜物をあなたが使えばみんなが成長するのです。ですから、ひとりひとりの大きな役割というのがおわかりいただけだと思います。何度も皆さんにお伝えしていますが、クリスチャンというのはただの傍観者であってはならないのです。クリスチャンというのは観客席に座って舞台でだれかが演じるのを観るのではないのです。クリスチャンというのは舞台の上で演じているのです。我々みんな働き人なのです。みんなの賜物を使わなければ神様のみこころをなすことはできないのです。そのことによってあなたも成長するし、あなたの周りも成長する。それが神が教えてくださっていることです。

(2) 注意すべきこと

① 自分自身を自慢すること

ただ、それぞれに違った賜物を与えられているのですが、注意しなければいけないことが先ほどのローマ12章に出てきます。それは自慢してはいけないということです。このプライドの問題というのは我々にずっとつきまとっています。パウロは先ほどのローマ12：3に「だれでも、思うべき限度を越えて思い上がっては」いけないと言うのです。つまりどっちがすぐれているのだというような愚かなことをしてはいけないと言うのです。あの人に比べて私の方が勝っているとか、あの人に比べて私の方が劣っているとか、そんな空しいことをしてはいけないと。また同時にこのみことばが教えるように「神がおののに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」「おのおの」と書いてあるのはすべての信者のことです。その信者に対して神様は賜物を下さった。あなたもイエス様を信じた時に神様は特別な賜物を与えてくださった。そしてその賜物を用いてあなたは主に仕えることができるのだと。

② 神のことばを信じないこと

神様がそう言われているのに注意しなければいけないのは、神が言われたことを信じない不信仰です。確かに私たちの肉は無理だとか、できないと言います。でも私たちの信仰って何でしょう？神を神として受け入れるのです。私たちがどう思うではなくて、神が言われたことを信じるのです。なぜなら神はあなたを救うと言われた。それを信じるのです。私たちは神様ができると言われたら、それを信じるのです。なぜなら神が言われたことだから。それが信仰なのです。その信仰を我々は学ぶのです。そこに妨げとなるのは、我々自身の人間的な考えや思いです。我々ができるのかできないかを判断しようと言うのです。我々の信仰というのは神が言われたことを信じるのです。神が言われたことは必ずそうなる信じ切った人はなんと幸いな人でしょう、そのとおりです。だからみことばを信じない信仰者であってはならないということです。

③ 満足しないこと

もう一つ、自分に与えられている賜物に対して満足しないということも問題です。先ほどもお話ししたように、あの賜物の方がよかったとか、私に与えられているのよりあの人の方がもらった賜物が欲しいとか、そんなことをしてはいけないということです。みんな重要なのです。神の前に我々はみんな平等なのでしょう？神がご自身のみこころによってみんなにそれぞれ賜物を下さった。私たちはそれを喜ぶことです。注意しなければいけないのは、私たちは人から注目される働きとか、重要視される働きを神のみこころに反して求めてはならないということです。我々の肉はそれを希望するかもしれない。パウロはそんなことをしなかった。だからパウロは言っているのです。彼は自分に与えられた務めに満足し、その務めに基づいて行動したのです。コリントの町を訪問したのもみんなから褒められるためではない。それが自分に与えられた務めだからそれを成すと。私たちは神様から特別な祝福をいただいている、神様は

私たちに特別な務めを下された。このすばらしい主を証するという務めを私たちはいただいたのです。しかもそのために私たちはこの賜物も与えられている。こんな祝福に私たちはもう既にあずかっているのです。これは私たちの将来の希望の話ではない。既に与えられた約束を私たちに語るのです。

2) 「神がおのおのおを召しになったときのままの状態」で生活する 17、20-24節

パウロが各信仰者が神の前にふさわしく生きるために教えた二つ目のことは、17節にあるみことば「神がおのおのおを召しになったときのままの状態」だということです。ここにある「お召しになった」というのは救いの話であるということはおわかりだと思います。神が罪の中から私たちを召して、神のもとに呼んでくださったのです。各自が救われていた時に置かれていた境遇で、継続して生活をなさないとパウロは教えます。みんないろいろ異なった境遇にいます。神様が私たちをその境遇の中で救ってくださったら、その中でしっかり歩み続けていきなさい。パウロはそのことをこの後説明してくれます。

ローマ帝国において教会というのは数も少なく、それでいて大変特異な存在であったということを皆さんよく理解できると思います。世の中からは考えられないような人々の集まりだったのです。なぜかという、教会には奴隷もいたし、自由人もいたのです。こういった身分の違う者たちが集まっていました。またユダヤ人や異邦人といった人種的に、また信仰的に異なる人々が集まっています。また社会的地位も異なる人々が集まっていました。さて、その人々が教会に集まって、主にある兄弟として差別のない平等な交わりを持っていた。もちろん女性に対しても平等な扱いをしていました。これはその当時の社会からすれば、一体あそこは何をしているのだと思ったはずです。でもみことばは「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」、ガラテヤ3：28です。確かに多くの人々は教会を見てあざ笑い、非難したでしょう。でも同時にそのような集まりがその地域にあって、社会にあって、大変な証であったことは言うまでもない。

ただ、この教会の中にいろいろなことが起こるのです。少なくとも兄弟姉妹として生活するに当たって、ある人々は人への羨みの念を抱くようになっていく。例えば奴隷は自由人のようになりたいと思うだろうし、ある人たちはユダヤ人たちのようになりたいだとか、そういう羨む念、そういう思いをやはり人々は抱いたようです。そこでパウロが教えます。神があなたを救われたのはあなたの置かれている境遇において主を証するためなのだ。だから救われた奴隷は奴隷という社会において、自由人も、ユダヤ人も、異邦人もそれぞれの社会でキリストにある救いのすばらしさを証すること、それが神が望んでおられることだと言ったのです。例えば奴隷という喜べない身分であっても、キリストによってこんなに幸せであること、そしてどんな理不尽な主人であっても、喜びと平安を持って主に仕えることができるという証が立てられたとしたら、それがどれほど大きな影響を周りに及ぼすかです。

救いというのはその人が置かれている状況や境遇を変えるものではないのです。イエス様を信じたらすべてがバラ色になると期待するかもしれない。でも聖書のどこにもイエス様を信じたら、あなたが置かれている状況や境遇が一変するとは教えていません。聖書が教えているのは、あなたがこの救いにあずかる時に、神はあなたの心を変えるということです。だから喜べない状況に生きていた人のその状況は変わらない。でも心が変わることによってその状況で喜べるということです。これまではその状況を憎み、その状況にいることを恨み、そこから解放されることを望んでいたかもしれない。でも心が変わることによって、その中で神を崇めることができるのです。感謝することができるのです。これが救いなのです。

ですからパウロは、あなたたちが置かれているその境遇、救いにあずかった時のその境遇、その中であなたは証をしなさいと教えます。なぜならあなたが置かれているその境遇、その状況は神から与えられたあなたの宣教地なのです。もう少しあの人の家庭のような環境で生まれたらよかったと思うかもしれない。もう少しこういう環境に生まれたらよかった、こういう人であつたらよかった、ああいう人であつたらよかったと。なぜ私たちは日本人として生まれたのです？偶然ですか？貧しい環境で生まれた人もいるし、そうでない環境で生まれた人もいるし、身体的にハンディがあろうとなかろうと、いろいろな中で私たちは生きています。こういう人のようであつたらよかった、こんな国に生まれたらよかった。そういうことを思う人はたくさんいるでしょう。でも我々クリスチャンはそうではない。パウロが教えることはそうではない。今あなたが置かれているところ、今あなたが直面している問題なり境遇なりそのすべてのことは、その中でキリストを証するために神が置いてくださっている境遇なのです。これがパウロが彼らに教えようとしたことです。

その思いがないと今あなたが置かれているところであなたは神を感謝することにはならないのです。ですからパウロは主が各信者に与えてくださった特別な人生を生きるという個人的責任があると教えたのです。私たちがしっかりと心に刻まなければいけないのは、神様、今置かれている環境より、よりよい

環境に私を移してくださいとか、今抱えている病気が治って健康になったらとか、神に感謝するために人間の、いやあなたの勝手な条件をつけてはいけません。私たちが神を感謝するのは、私たちが神をたたえるのはこの方が神だからです。私の願いを聞いてくださったから感謝するのではないのです。なぜなら私たちの人生というのは私たちの願い事を神に聞いてもらうように、そのことを願いながら生きるのではなく、神の願い事にみずからを沿わせてそれに従って生きていこうとするのです。ですから確かにコリント教会の人たちはいろいろな問題を抱えていました。もう既に見て来たように結婚もいろいろな問題があった。そういう問題に答えたパウロは、でももっと大切なものに目を向けなさいと言って、彼らに大切なことを教えてくれるのです。

最後に彼らにこう言います。「私は、すべての教会で、このように指導しています。」、この「指導」というのは命令しているのです。彼はどこへ行ってもこのことを教えたと言うのです。いろんな教会にはいろいろな問題があったでしょう。パウロはすべての教会にあってこのことを教えた。あなたは神様から特別な務めをいただいている。そして今あなたがいるその環境は、その状況は、置かれているところは、神が置いてくださった。もちろん罪の中なら問題ですよ、そんな話をしているではありません。前回見たように、ある人はご主人なり奥さんが救いにあずかっていなかった。そういう環境があつて彼らは質問してきたのです。どんな状況にあつてもあなたが覚えなければいけないのは、神がそこに置いてくださり、その場にあつて、キリストのすばらしさを証すること、それがあなたに与えられた大切な務めなのだと言うのです。

2. その例 18-23節

その後18-23節にその例が記されています。

1) 「割礼」 18-19節 ガラテヤ5：2-3

18節「召されたとき割礼を受けていたのなら、その跡をなくしてはいけません。また、召されたとき割礼を受けていなかったのなら、割礼を受けてはいけません。割礼は取るに足らぬこと、無割礼も取るに足らぬことです。」、もしあなたが救いにあずかった時に割礼を受けていたらそれを隠すことも必要ない、それを恥じ入ることもない。救われた時に受けていなかったら、受ける必要もない、取るに足らないことだ、つまり救いにおいては全く価値のないものだと言うのです。なぜこんなことを教えるかという、救いを受けるためには割礼を受けなければいけないと言う人々がいたのです。パウロはガラテヤ人の手紙の中でも警告しています。「よく聞いてください。このパウロがあなたがたに言います。もし、あなたがたが割礼を受けるなら、キリストは、あなたがたにとって、何の益もないのです。割礼を受けるすべての人に、私は再びあかしします。その人は律法の全体を行なう義務があります。」、ガラテヤ5：2-3です。彼が言いたいのは、もし割礼を受けることによって救われると言うのなら、その人が覚えなければいけないのは割礼だけではなくてそれ以外のすべての律法を守らなければ救いにあずかることはないということです。ほかのすべての律法に逆らっていて、ただ割礼を受けたから救いにあずかるか、そんなことはないと言うのです。律法による救いを求めるのなら、律法のすべてを完璧に守らなければいけない。そんな人います？律法が与えられたのは私たちが神の基準からどれだけ逸脱しているのかを我々に悟らせるためです。神が望んでいる完全な聖さからどれだけ自分が外れているのかを私たちが気づくために律法は与えられたのです。

ですから、もし割礼という律法の教えを守ることによって救いにあずかると言うのなら、すばらしい知らせがあります、あなたはそれ以外のすべての律法を守らなければいけない。そういうことを教えている人がいたのです。ですからパウロはガラテヤの手紙の中でもそれがいかに空しいのかを教えたし、また同じことをコリントの中でも教えるのです。人々は外見上のことだけを重要視しているのです。本当に神様がお喜びになり、神の前に価値があるのは、一体何かを考えないのです。こういうことさえしておけばきっと神様はお喜びになるに違いない。本当にそうかどうかです。そこでパウロは割礼を受けるかどうかよりもっと大切なこと、もっと神がお喜びになることがあると言うのです。もしあなたが神様を喜ばせたいと思っているなら、重要なのは神の命令を守ること、それが神がお喜びになる生き方だと。それを神が我々に望んでおられるのだとパウロは教えます。

2) 「奴隷」 20-23節

20節「おのおの自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。」とパウロはもう一度同じことを言います。「奴隷の状態で召されたのなら、それを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。」、実はローマ帝国内には6,000万人の奴隷がいたと言われていました。奴隷だらけでした。奴隷というのは物であつて、主人の道具、人間とは見なされていなかったのです。主人が望めば奴隷を殺すことができたし、それによって主人が捕まって罰せられることもなかった。だから私たちが想像している以上に、奴隷は自分の身分を引け目に感じていたでしょう。自分が奴隷として生まれたことを恨んだかもしれない。パウロは教えるのです。奴隷の状態でああなたが救われたなら奴隷

であることを気にしてはいけないう。なぜなら奴隷であるとか自由人であるとか、そんなことはどうでもいい。そんなことは大切なことではない。何が大切なのか——。もしあなたが奴隷として救いにあずかったのなら、救われたことを喜び、そのことを感謝することであり、奴隷という立場や境遇を悲観することではないのだと。

またここに「自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。」とあります。なぜならその当時にも奴隷が自由になることはあったからです。つまり自分を買取るだけの金が集まればいいのです。パウロはこんな話をします。「奴隷は自分の余暇を利用して雑用をして、金を稼ぐことができた」、当然主人に仕えるのだけれども、余暇があればアルバイトをしてお金を少し稼ぐことができた。それを彼が仕える宮に預け、自分を買取るだけのお金がたまると自分の主人を宮に連れて行き、祭司が集まっていた金を主人に渡すことによって彼は自由となったのです。そういうことがなされていたのです。パウロはそのこともちゃんとわかっていたのです。ですから「自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。」と。問題は自由であるとか奴隷であるかではないと。それよりもっと大切なことはこの救いにあずかることだと。だからもし奴隷として救いにあずかったのだら、そのことを恥じるのではなくて、感謝して周りの主を知らない奴隷たちに主のすばらしい証をなしていきなさいと。その人にしかできない働きがあるのです。

パウロは投獄された時に、ローマの親衛隊たちにキリストの福音を語るでしょう？その境遇に置かれていなければ彼らに福音を語る機会はなかったでしょう。例えば彼が投獄された時に「神様、なんで私が投獄されるのですか、あなたに仕えて来たのに何か悪いことしましたか？」と言って自分の境遇を嘆いたり、神に不満を言ったことはありませんでした。その置かれているところが与えられた務めを果たす場所だったのです。投獄されればそこで福音を語ったのです。自由とされたらそこで語ったのです。この奴隷たちもその場で救いの喜びを語れば、多くの奴隷たちが同じようにこの救いにあずかるでしょう？自由人であれば、そこでキリストのすばらしい救いを語ればその中で救いにあずかる多くの自由人が与えられるし、ユダヤ人であったとしても、異邦人であったとしてもそんなの関係ない。救いにあずかったあなたは置かれているところでしっかりとキリストの証しをなしなさいと教えるのです。

そして22節に「奴隷も、主にあつて召された者は、主に属する自由人であり、同じように、自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです。」とあります。奴隷であっても自由人であっても、神の前では同じだと。おもしろいことを言います。「主にあつて召された者」は奴隷が救いにあずかったならその人は主に属する自由人だ、なぜかというは彼は罪の束縛から完全に自由とされたのでしょうか？我々キリストにある自由を見てきました。私たちをとりこにしていたその罪から解放されたのです。永遠の滅びから解放されたのです。ですからあなたは奴隷かもしれないけれども、救いにあずかったあなたは神にあつて自由人とされたと。同じように自由人も主によって召された者はキリストに属する奴隷だと。確かにあなたは自由人かもしれない。でも救いにあずかったあなたは主という、神という主人に従う奴隷となったのだと。奴隷であろうと自由人であろうと、神がそこに置いてくれたのだから、私たちが悲観すべきことではないと。

そして最後23節に「あなたがたは、代価をもって買われたのです。」と、既に私たちが見てきたこの20節の真理を繰り返しています。キリストの代価をもって、キリストの命をもって、あなたも私もその罪の市場から買い取られたのです。我々は救われたのです。罪の赦しをもらったのです。もう私たちは罪のさばきを恐れながら生きるのではないのです。それはもう終わったのです。過去の話です。この救いにあずかるために神がなしてくださったみわざ、私を永遠の滅びから救い出してくださった。私は自由とされ、この救いにあずかったのだと。だから私が奴隷だとか自由人だとか、貧しいとか金があるとか、教育があるとかないとか、そんな永遠に価値のないものに煩わされるのではなくて、私たちがフォーカスを当てなければいけないのは、こんな私を神が救ってくださった。そして今置かれているところで私はこのキリストを証する。それが神が私に望んでおられることだということ覚えて生きなさいと言うのです。

23節に「人間の奴隷となつてはいけません。」とあります。パウロが教えたかったのは、あなたは救いにあずかり、神が代価を払ってあなたを救ってくださったのだから、「人間の奴隷とな」る、つまりこの世の考え方や生き方、私たちのうちにある欲の奴隷となつてはいけないうと言うのです。そのようなものに従つてはいけないうと言うのです。実際に存在した奴隷になるという話ではないのです。私たちはいろいろなものの奴隷になり得る、その弱さを持っている存在です。だからそういうものから完全に離れなさいと。まさにそれがコリント教会の問題だったのです。彼らは神の教えでないいろいろな間違った人間の教えを信じ、従っていたのです。そういうことになつてはならない。我々はしっかりと神のことばに立たなければいけないとパウロは教えます。でもそれは私たちにも必要なことです。我々もクリスチャンとして同じことを繰り返しています。集会にも出ているし、聖書も読んでいるし、祈りもしている

し。でも注意しなければいけないのは、確かにそのような外面的には、行動だけはそうかもしれないけれども、問題は神がごらんになっておられる内側がどうかということです。私たちの神に対する思いというのは成長しているのかどうかです。神への愛が成長しているのかどうか——。神を喜ばせたいという思いが私たちの心を常に支配して、それが動機となって生きているのかどうかです。だから私たちも自分の動機を確認するために、おまえは何のためにしているの？とみずからに問いかけることが必要だと思いませんか？その目的を考えずにただ同じことを繰り返しているだけでは、ひょっとしたらあなたは確かに行動において熱心かもしれない。でもそれを神は喜んでおられない可能性があるのです。

思い出してください。イエス様がマタイ15：9やマルコ7：7で同じことを言っています。「彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。」、確かにしていることだけを見たら神が喜ばれるようなことをしていたのです。でも神は喜んでいなかった。何度も私たちが見ているように、こうして皆さん礼拝に集まっているけれども、問題はあなたが本当に礼拝者として正しく神の前に立っているかどうかです。あなたの捧げた神様へのいけにえが神が喜んで受け入れるいけにえかどうかです。神はあなたのその賛美に耳を塞いでおられるかもしれない。あなたのその礼拝の行為を神様は目を背けて見ないようにしておられるかもしれない。なぜなら礼拝していないからです。礼拝という場、時間に参加しているにすぎない。だから私たちに必要なのはその神が私たちの心を常にごらんになっておられるという畏れです。そのすべてのことが問われる日が来るのです。

ウィリアム・バークレーはこの救いということに関して非常におもしろいことを書いていたのでノートに書いておきました。「パウロはクリスチャンを『神に捧げられた人々となるために召された人々』と説明した。」、こんなふうにクリスチャンを定義しました。「ギリシャ語の一語をこのように訳したのである。その言葉とは『ハギオス』であり、欽定訳（昔の英語のKing Jamesという聖書です）聖書では『セインツ』（日本語で言えば聖徒や聖人）と訳している。しかし今日ではこのことばは原語の意味を正しく伝えない。『ハギオス』とは、神への奉仕や持ち物として捧げられた物や人を意味することばである。この言葉は神のために選ばれた神殿やいけにえを意味する。さて、もし人が神に特別に属する者として選ばれているのなら、彼はみずからの生活においても、また品性においても、神の働きのために相応しい者であることを示さなければならない。」、つまりどんなふうに生きるか責任があるということです。「そこから『ハギオス』が聖い、聖者のようにという意味を持つようになった。しかしこの語の語根的な概念は『分離』である。ハギオスである人は他の人々とは異なる。それは彼が特別に神に属するために普通の人たちから分離されているからである。これがユダヤ人たちが自分たちのことを説明するために用いた形容詞でした。彼らはハギオス・ラオス、つまり聖なる民、他の人々とは全く異なる国家。なぜなら特別な方法で彼らは神に属しており、そして神への奉仕のために分離されていたからである。パウロがクリスチャンをハギオスと呼んだとき、クリスチャンは他の人達とは異なるという意味だった。それはクリスチャンは神に、また神の奉仕に特別に属しているからである。そしてその違いは普通の生活をやめることによって示されるものではなく、生活に伴う質、（つまり普通の人とは違った、聖徒らしい生活や品性を表わす）という形で示されるのである。」、つまりどういうふうに我々が生きるか、そこが肝心だという話です。私たちはこの世に染まって生きるのではないのです。そこから分離されたのです。我々自身の生き方がどうなのか、それぞれが吟味してみる必要があります。

結論：24節

このメッセージを与えたパウロは最後に24節で「兄弟たち。おのおの召されたときのままの状態、神の御前にいなさい。」と言っています。パウロは最後に主に対して常に忠実であるようにというメッセージを与えます。主を信じて主に従っていくようにと彼は教えます。あなたは奴隷かもしれないし、あなたは自由人かもしれない。既婚者かもしれないし、独身かもしれない。やもめかもしれない。パウロが教えたことはどのような立場や境遇や状態でもそのことを卑下しながら自分の理想にかなった状況を待つのではなくて、今置かれているところでしっかりと主の救いを伝えていくのです。またどのような状況にいてもその状況を主に感謝して、主に仕え続けていくこと。なぜなら主がそこにあなたを置いてくださったから。だから今あなたが置かれているところで、愚痴るのはやめなさい。かえって感謝しなさいと。あなたはそこで神様によって用いられるのです。だから奴隷は奴隷としてその環境の中で証をすることができる。そこから自由にされたらそれはすばらしいし、そうしたら自由にされた者としてしっかりと証をしなさいと。この社会的な身分や地位がどうあれ、そんなのは関係ない。あなたは主によって救われた者として、主の証し人としてしっかりと生きなさいと。特別なあなたは特別な務めをしっかりと果たしなさい。

そして最後に「神の御前にいなさい。」、こんなことばを加えます。なぜかという、それが鍵だからです。これを直訳すると、神とともに居続けなさいと言っているのです。これは現在形による命令で

す。ということは神がともにいてくださるということをおぼわすは、あなたがおぼわすところでおぼわす神のおぼわすをなしていくためには、間違いなく神のおぼわすが必要なんです。そのおぼわすはもう既に与えられているんです。私たちの主は、あなたのおぼわすは、あなたのおぼわす主でしょう？あなたのおぼわすはあなたを慰めてくださる主でしょう？私たちは弱いんです。失敗します。慰め主であり、弱いあなたを励ましてくださる励まし主であり、そしてあなたを導き、あなたを守ってくれるよい羊飼いでられる。私たちの力は私たちのうちにはないんです。私たちの力は神のうちにあるんです。この神がともにいてくださるから、今私たちが見ているようなこともできるんです。喜べない状況で喜べるんです。感謝できないところで感謝できるんです。それは神の力なんです。そして私たちは自分の力を世に示すのではない。自分のすばらしさを世に示すのではない。神の力を、神のすばらしさを世に示していくんです。だからパウロは神とともに歩み続けなさいと言うんです。神に助けを求めながら、神の力をいただきながら歩いていきなさいと。

テサロニケの教会はまさにそのようなすばらしい教会でした。パウロはこんなことを言っています。「あなたがたはどのように歩いて神を喜ばすべきかを私たちに学んだように、また、事実いまあなたがたが歩んでいるように、ますますそのように歩いてください。」(1テサロニケ4:1)と。彼らは神を喜ばせていたんです。彼らの生活が神を喜ばせていた。つまり私たちもそのように生きることができるんです。神のおぼわすです。神とともに歩むことです。神はあなたとともにいてくださるんです。それを忘れているのはあなたなんです。

最後に、どんな時でも、どんな状況でも、私たちは喜んで主に仕えることができるんです。確かにこの世も幸せの条件を語ります。しかしそれはこの世が提供する一時的な偽りの幸せです。しかし神は本当の幸せを与えてくださる。そしてその幸せを楽しむためには、主とともに歩み続けることです。そうやって生きるんです。